

Merry Christmas & A Happy New Year !

今年もお世話になりました。来年もよろしくお祈りします。

Review of 1996, Hope for 1997

◆浩司編

1996年もまた充実した1年でした。今年1年を振り返った時に一番貴重だったと思うのは、やはりネパール語を勉強し始めたことでした。まだまだ語彙も少ないし文法もデタラメですが、どうせ初心者で下手なのは当たり前と開き直り、ボソボソとしゃべる英語や日本語に比べてトーンが一段高いしゃべり方です。言いたいことを口にできるようになって、この国で生きてゆく自信が出てきたようです。地方に行っても、「このビデシ(外国人)はネパリを話す。」と人々に可愛がってもらい、楽しく過ごすことができました。未だ政府の役人と交渉できるレベルまでは到達しておりませんが、デバナガリ文字もまだ習い始めたところですので、これが来年の課題です。英語がそこそこ通じるこの国で、JICAの仕事をしつづけるのにネパール語は必ずしも必須ではなかったのですが、今は習って正解だったと思います。

◆美澄編

今年1月にネパールに着いた時は、久しぶりに夫に会えた嬉しさとこれからのネパールでの生活に対する不安で一杯でした。初めはネパール語がまったく解らず、ネパール語しか解らない使用人とのコミュニケーションに苦労しながらネパール語を覚え、今では簡単な日常会話はこなせるようになりました。言葉を覚えるにつれてここでの生活のペースもつかめ、楽しく過ごしています。

そして、11月に妊娠していることがわかり、3カ月目に入るとき思いがけず出血をし、お医者様から絶対安静を言い渡され、何もできず、周囲の方々に心配をかけつつ色々とお世話になり、人の温かさを実感いたしました。

幸い出血はとまり子供も順調に育っているようです。これからは母になる自覚を持ち慎重に行動して行かねばと思い、来年は子供が無事に生まれてくることを祈るのみです。ちなみに予定日は7月5日で出産は日本です予定にしています。いよいよ自分が親になるのかと思うと感慨深いものがあります。

目撃！夜のエアポート 闇に蠢く怪しい奴

11月28日(木)、私は午後11時40分到着の日本からのお客様を出迎えに、深夜の空港に一人車を走らせた。予め取得しておいた空港入場許可証(パス)を提示して、税関を抜け、バゲッジクレイムを通り過ぎ、空港2階にある入国審査のフロアで到着を待った。フライトは遅れ、時計は午前零時を回った。辺り的人影は少なく、免税店の明かりだけが煌々と灯っていた。(寒いな。まったく、本部の奴等はなんでこんな遅いフライトにブッキングしやがったんだ。)などと一人呟きながら、私は退屈しのぎに文庫本を取り出し、寒さで集中もできないままにページをめくり始めた。

すると、入国審査窓口の階段の方から、人の靴音が響いてきた。やがて男達がフロアに姿を現した。普通のネパール人だ。でも、パスを持っている奴は少ない。彼等は2、3人のグループで免税店に入って行った。そして、数分間店員と会話をした後、皆ビニール袋を片手に下げて店から出てきた。よく見ると、それはウイスキーやブランデーのボトルだった。

こうした光景が、フライトが到着した午前零時50分までの間に、実に十数回にわたって繰り返された。中には警察官とおぼしき人物も、悪びれもせずボトル2本ぶら下げて歩いていたりもした。これは明らかな免税品の横流しである。

酒というのは、奢侈品として税率も高い。従って、免税店で無税の酒を調達してこれを市中で売りさばれば、課税分がまる儲けとなり結構おいしい商売となる。彼等が持ち帰った酒を彼等自身が飲むとは決して考えられない。こうした悪どい商売が警察までも巻き込んで深夜のエアポートで行われていたとは、粗方想像はしていたものの、やはり驚くべきことだ。官民の癒着は日本だけではない。ネパールでも横行していたのである。

それにしても、こんな遅い時間の空港出迎えは本当にやりたくない。

(浩司)

Message from Koji & Misumi...

カトマンズの日本食レストラン たまに行くにはいいかも・・・

日本人観光客が結構なお客様であるこの国では、一応日本食レストランも増えてきている。そのいくつかを紹介しよう。

(1) 「田村」 (Hotel Kidoに隣接)

ここは約1カ月に1回は必ず来ている。仕事で夕食会をセットする場合も使う頻度が高い。8月にデリーの日本大使館の館員をここに案内した時に、噂の「田村」に感激していた。腹をこわした時によく「おじや」を食べに行ったものだ。私の好みはデザート「マンゴシャーベット」である。ここで日本米も買うことができるのでなかなか貴重している。

(2) 「富士」 (Kantipathに面する平屋建てのレストラン。入るのに池を渡る。)

とんこつラーメンが食べたくなると出かける。餃子と合わせて500ルピー (約1000円) は、味に比べて割高である。シェフがHotel Sunset Viewに引き抜かれて以来味が落ちたともっぱらの評判で、先日調査団を連れて行って「まずいね。」と言われた。ここはビデオが借りれる。それを目当てに行く人も多いらしい。大使館員がよく出入りしているようである。

(3) 「横 (Maki)」 (Durbar Hotel 5階)

カトマンズで最も高いレストランだと思う。一度美澄と一緒に行って1人頭1000ルピー取られたことがあり、付き合いでなければプライベートでは絶対行かないと心に誓っている。料金と味が見合っているならまだしも、サービスも良くないし、異常に高く行く気がしない。私はここのトンカツを食べて腹をこわしたこともある。

結局のところ、わざわざ高い料金払ってまで食べに行くほど美味しい日本食は殆どなく、たまに恋しくなって出かけるくらいなのだ。そこらへんで普通に昼食食べるなら100ルピーで十分な町である。日本食レストランがいかに高いかわかりいただけるだろう。でも、折角日本からはるばる来られたお客様のために、お客様のおごりの時は「横」、割り勘の時は「田村」にはご案内したいと思っている。他にも「古都」「串藤」「バンバン {ここは中華料理らしいが}」があるが、カラオケが目的で「バンバン」を時々使うくらいで、後の2店は駐車場がないために殆ど行ったことがないため、コメントは控える。

因みにインド料理も結構高めであるが、プタリサダクの「タージマハール」はなかなかお勧めだと思う。 (浩司)

「メトロポリタンジャーニー」をぶっ飛ばせ! シャンジャの山村巡り

友人から借りたビデオで、最近日本で人気の番組「メトロポリタンジャーニー」のネパール観光編を観たが、正直言って憤慨した。たかが3泊4日のネパール旅行で8万円も使うとは言語道断。私は先日、5泊6日のシャンジャ郡小学校視察に行ったが、郡内での5日間であんなに500ルピー程度 (交通費除く) しか使わなかったぞ!

シャンジャ郡はポカラのあるカスキ郡の南に位置し、今年度から54の小学校の教室を建設するための資材供与をわが国が行うことになっている。また、郡の南東の外れにあるビルガ村には、川村昌広隊員が既に2年半滞在し、中学校で理科を教えている。今回の出張では、これから建設の始まるサイトの幾つかを視察すると同時に、川村隊員の任地を訪問した。

まず、最果ての地ビルガに行く。ミルミまでジープで行き、そこから2時間歩いた。ビルガには宿泊施設などなく、同隊員の下宿の近所の民家に泊めていただいた。当然食事は地べたに座って右手で食べるネパール式だ。パフンカーストが大半を占めるこの村では、酒も飲まない肉も食べない。民家だから自分の畑で作っていない作物は料理でも出てこない。よってこの家でのメニューはダルバート (11月号参照) のダル抜き、白いご飯にジャガイモのカレー煮 (いわゆるタルカリ)、それに大根の漬け物のみだった。パフンの人はダルスープの代わりになんと牛乳をかけてご飯を食べる。ビルガには電気もない。よって9時を過ぎたらお休みなさいである。トイレもない。当然野グソだが、各家で場所は決まっているらしい。

ビルガで2泊した後、我々はシャンジャバザールに向かった。シャンジャバザールはポカラから35km、大きな集落だ。生活用品はなんでもあがるが、土産物屋は当然ない。バザールには片岡信幸隊員が下宿しており、彼のお勧めのカルパナホテルに2泊した (1泊60ルピー!!)。タカリー族の経営するこのホテルのダルバートは片岡隊員に言わせると少々塩辛い (私はそうは感じなかったけれど)。ここはひとつバザールの南外れに近いシカールホテルのダルバートを食べて行ってみる。シカールホテルは看板がネパール語でしか書いてない。よって探す時は道路の谷側の道筋で "Iceberg" ビールのせりだし看板を出している店を目指すといよい。ここのダルバートも美味しかった。1食25ルピー程度だ。この他にも、トゥクパというカレースパゲッティみたいな料理を出す店もあり、なかなかグルメなバザールだ。

さて、肝心の小学校視察であるが、シャンジャバザールを起点として、トゥラディヒとセティベニという村の小学校を調査した。トゥラディヒで訪問した2校のうち、バラヒ小学校は小高い山のでっぺんにあり、校庭からアンナプルナやマナスルを一望できる素晴らしい土地だった。バザールからだ歩いて4時間はかかるだろう。バラヒはマガル族の多い集落だ。トゥラディヒはまた、スタラ (ミカン) の名産地でもある。

セティベニもやはりバザールから歩いて4時間はかかる。アディコーラ川の上流にあるこの村では、バンスコット小学校に校舎が増築される。ここの生徒は殆どがカミ、サルキといった低カーストである。低カーストの児童の就学率は一般的に悪く、校長先生はそうした生徒の父兄を説得し、教育の必要性を説いて回っているという。学年が上がるにつれて低カーストの生徒が淘汰されて次第にパフンの生徒ばかりになってゆく現実をビルガで見せられたばかりだったので、バンスコットの生徒達がなんとかドロップアウトすることなく初等教育を終了してほしいと願わずにはおれない。

さて、シャンジャ滞在中は1日2食の普通のネパール人の生活をした。ほぼ毎日が安くうまいダルバートとチャーのみで、合計しても300ルピーはかかっていない。民家でお世話になりながら、彼等の日常生活を見て歩くのもまたネパールを知る方法だと思う。訪問したいずれの村も独特の風情があって、また泊まりがけで行ってみたいと思っている。 (浩司)

★お断り

今回は都合により「私の仕事紹介」「編集後記」を割愛させていただきました。次号をお楽しみに!

